



普及版

吉川英治代表作品

悠久の大自然と治乱興
亡果てない大陸の歴史
が育くんた複雑な中国の人と
心。魏蜀呉三国の覇権と政治
の妙に学ぶ生甲斐と身の処し方
改めて日中文化の関連と我が人
生とはとを考える自戒の書。

吉川英治

三國志

九



吉川英治

三 国 志

第九卷 出師の巻

三国志 9巻 (全10巻)

昭和32年3月31日 初版発行

昭和62年10月30日 第70刷発行

著者 吉川 英治

発行者 賀 来 壽 一

発行所 株式会社 六興出版

東京都文京区水道2-9-2 〒112

電話東京(943)3431 振替東京 1-92448

印刷 図書印刷株式会社

製本 株式会社 明泉堂

落丁本、乱丁本はお取替えいたします

© 1957, Fumiko Yoshikawa, Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

ISBN 4-8453-0209-8 C0093

目

次

骨を削る	三
建業会議	八
呂蒙と陸遜	一三
笠	一七
荊州変貌	二〇
鬢糸の雪	二七
月落つ麦城	三三
蜀山遠し	三七
草喰わぬ馬	四六
国葬	五一

魚	遺孤を託す	孔明を呼ぶ	石兵八陣	白帝城	一書生	慰靈大望	冬將軍	此の一戰	吳の外交
紋…………… 一七六	…………… 一七一	…………… 一六六	…………… 一六一	…………… 一四九	…………… 一四二	…………… 一三八	…………… 一三三	…………… 一二八	…………… 一一九

蜀 吳 修 交	一八六
建 艦 総 力	一九三
淮 河 の 水 上 戦	一九八
南 蛮 行	二〇三
南 方 指 掌 図	二一二
孟 獲	二一九
輸 血 路	二二四
心 縛	二二九
孔明・三擒三放の事	二三四
王 風 羽 扇	二四二

毒	泉	二四九
蛮娘の踊り		二五四
女傑		二六一
歩く木獣		二六八
藤甲蛮		二七三
戦車と地雷		二七八
王風万里		二八三
鹿と魏太子		二八八
出師の表		二九二

出^{すい}

師^し

の

卷^{まき}

骨を削る

一

まだ敵味方とも気づかないらしいが、樊城の完全占領も時の問題とされている一歩手前で、関羽軍の内部には、微妙な変化が起こっていたのである。

魏の本国から急援として派した七軍を粉碎し、一方、樊城城下に迫ってその余命を全く制しながら、あともう一押しという間際へ来て、何となく、それまでの関羽軍らしい破竹のごとき勢いも出足が鈍ったような観がある。

この理由を知っているのは、関平その他、ごく少数の幕僚だけだった。

今も、その関平や王甫などの諸将が、額をあつめて、
「……何にしても、全軍の死命に関わること、なおざ

りには致しておけぬ」

「一時の無念は忍んでも、ひとたび軍を荊州へ回し、万全を期して、出直すことがよいと考えられるが」

「……どうも困った事ではある」

沈痛に囁き交わしていた。

ところへ一名の参謀があわただしく營の奥房から走ってきて、

「羽大將軍のお下知である。——明日暁天より総攻撃を開始して、是が非でも、あすのうちに、樊城を占領せん。自身出馬する。各々にも陣々へ旨を伝え、怠りあるなかれ——との仰せです」

と、伝えて来た。

「えっ、総攻撃を始めて、戦場へ立たれると？」

人々は愕然と顔見合わせ、それは一大事であるといわねばかりに、一同して營中の奥まった一房へ出向き、

「今日は御気分いかがですか」

と、恐る恐る帳中を伺った。

関羽は席に坐^{すわ}っていた。骨たかく顔いろも勝^{まさ}れず、眼のくぼに青ぐろい疲れが窺^{うかが}われるが、音声は常と少しも変わることもなく、

「おう、大したことはない。打ち揃^{そろ}って、何事か」

「ただ今、お下知は承りましたが、皆の者は、さなきだに、御病体を案じていた所とて、意外に打たれ、もうしばし御養生の上になされてはと、お諫^{いさ}めに出た次第です」

「ははは。わしの矢瘡^{やそう}を案じてか。——案ずるなかれ。これしきの瘡に何で、関羽が屈するものか。また何で天下の事を廃^{はい}されようぞ。あすは陣頭に馬をすすめ、樊城^{はんじやう}を一揆^いみに踏み潰^{つぶ}さずには措^{はか}かん」

王甫^{わうふ}は膝を進めて、

「お元氣を拝して、一同、意を強ういたしますが、いかなる英傑でも、病には勝てません。先ごろから御容態を拝察するに、朝暮のお食慾^{しよくよく}もなく、日々お顔のいろも冴^さえず、わけて御睡眠中のお唸^{うなり}きを聞くと、よほ

どな御苦痛にあらずやと恐察いたしております。なにとぞ、蜀^{しよく}にとつて唯一無二なるお身でもあり、かたがた、将来の大計のため、ここはひとたび荊州^{けいしゆ}へお引き揚げあつて、充分なる御加養をして戴^{いた}きたいと存ずるのであります。……いま大將軍の御身に万一のことでもあつては、ただに荊州一軍ばかりでなく、蜀全体の重大なる損失ともなることですから」

「……………」

黙然と聞いていた関羽は、やおら座をあらためて、王甫のことばを抑えた。

「王甫王甫。また関平もその他の者も、無用な時を費やしました無用な心をつかわなくてもよい。わが生命はすでに蜀へささげているものだ。武人の一命は常に天これを知るのみ。樊城一つを攻めあぐねて、荊州へ引き揚げたりと聞いている以後、関羽の武名はともあれ、蜀の国威にかかわる。——一矢の瘡など何かあらん。戦場に立てば十矢百矢も浴びるではないか。黙って、

わしの下知に服せ」

人々は、一言もなく、そこを退がったが、憂いはなお深い。その夜、関羽はまた、大熱を發し、終夜、痛み苦しんだ。龐徳に射られた左の臂の瘡である。あの鐵に、死んだ龐徳の一念がこもっているかのようにだった。

總攻撃も、ために自然沙汰止みになった。

王甫や関平は、諸方へ人を派して、

「名医はないか」と、遍く求めさせた。

するとここに風来の一旅医士が童子一名をつれ、小舟にのつて、呉の国の方から漂い着いた。沛国譙郡の人、華陀という医者だった。

二

江岸監視隊の一将が、華陀を連れて、関平の所へ来た。

「この旅医者は、呉の国から来たと申しますが、先ご

ろより諸州へ医師をお求めになっておる折から、あるいはお役に立つかも知れぬと存じて連れ参りました」

関平はよろこんで、ともあれ自分の幕舎へ迎え、まず鄭重にたずねた。

「先生の尊名は？」

「華陀、字は元化」

「さては、呉の大將周泰の傷を治したと聞く名医でおわすか」

「かねがね景仰する天下の義士が、いま毒矢にあたつてお悩みある由を承り、遠く舟を繰って駆けつけたわけござる」

「父は蜀の大將軍たり。先生は呉国の医たるに、そも何の故あつて、はるばる渡られたか」

「医に国境なし。ただ仁に仕えるのみです」

「おお、では早速、父の毒傷を診て下さい」

華陀を伴つて、彼は父の帳中へ行った。折しも関羽

は馬良をあいてに碁を囲んでいた。大熱のため口中は
渴いて棘を含むがごとく、傷口は激痛して時々五体を
慄わすほどだったが、豪毅な精神力はそれを抑えて、
人には何気なく見えるほど平然と囲碁に紛らわしてい
るのだった。

「父上。呉の名医華陀がはるばる見えました。ひとつ
瘡の治療を請われてはいかがですか」

「む。む。……待て待て。馬良、こんどはわしの番
か」

衣服を袒ぎながら、関羽は瘡を病んでいる片臂を医
師の手にまかせ、なお、右手では碁盤に石を打ってい
た。

「どうじゃ馬良。名手であろうが」

「何の……その一石は、やがて馬良の好餌でしかあり
ませんぞ」

二人とも碁に熱中していて、華陀の顔すら振り向か
ない。——が華陀は、関羽のうしろへ寄って、肌着の

袖口をめくりあげ、じっと臂の傷口を診ていた。

侍側の諸臣はみな眼をみはった。瘡口はさながら熟
れた花梨の実ぐらいに膨れあがっている。華陀は嘆息
をもらした。

「これは烏頭という毒薬が鐵に塗ってあったためで、
その猛毒はすでに骨髓にまで通っています。もう少し
放っておかれたら片臂は廢物となさるしかなかったで
しょう」

関羽は初めて華陀の顔を振り向きながら、

「今のうちなら治る法があるか」とたずねた。

華陀は自信をもって、

「ある事はありますが、ただ將軍が愕き給わんことを
畏れます」

「ははは。死をだに顧みぬ大丈夫が、医師の手に弄ら
れるぐらいな事で愕きはせぬ。よいように療治してく
れ」と、片臂を委せたまま、ふたたび盤上の対局に余
念なかった。

華陀は、藥囊を寄せて、中から二つの鉄の環を取り出した。一つの環を柱に打ち、一つの環に関羽の腕を入れて、繩をもって縛りつける準備をした。関羽は、異な事をするものかなと言わぬばかりに、わが腕を見て、

「華陀とやら、どうするのか」

と、訊いた。華陀は答えて、

「医刀をもって肉を裂き、臂の骨を取り出して、烏頭の毒で腐蝕したところや変色した骨の部分をきれいに削り取るのです。おそらくこの手術で氣を失わぬ病人はありません。いかに將軍でも必ず暴れ苦しむに違いありませんから、動かぬように、しばらく御辛抱をねがうわけで」

「何かと思えば、そんな用意か。大事な、存分に療治してくれい」

鉄環を除いて、そのまま、手術を請うた。

華陀は瘡を切開しにかかった。下に置いた銀盆に血

は満ち溢れ、華陀の両手もその刀もすべて血漿にまみれた。その上、臂の骨を鋭利な刃ものでガリガリ削るのであった。関羽は依然として碁盤から眼を離さなかったが、周りに居た関平や侍臣はみな真蒼になってしまい、中には座に耐えず面をそむけて立って行った者すらある。

ようやく終わると、酒をもって洗い、糸をもって瘡口を縫う。華陀の額にもあぶら汗が浮いていた。

建業會議

一

手術を了えて退がると、華陀はあらためて、次の日、関羽の容体を見舞いに來た。

「將軍。昨夜はいかがでした」

「いや、ゆうべは熟睡した。今朝さめてみれば、痛みも忘れておる。御身は実に天下の名医だ」

「いや、てまえも随分今日まで、多くの患者に接しましたが、まだ將軍のような病人には出会ったことがありません。あなたは実に天下の名患者でいらっしゃる」

「ははは。名医と名患者か。それでは病根も陥落せずにおられまい。予後の養生はいかにしたらよいか」

「怒らないことですな。怒気を発するのは禁物です」

「かたじけない。よく守ろう」

関羽は百金を包んで華陀に贈った。華陀は手にも取らない。

「大医は国を医し、仁医は人を医す。てまえには国を医するほどの神異もないので、せめて義人のお体でも癒してあげたいと、はるばるこれへ來たものです。金儲けに來たわけではありません」

飄然とまた小舟に乗って、江上へ去ってしまった。

そのころ、魏王宮を中心とし、許都、鄴都の府は、異様な恐慌に戦っていた。

早馬、また早馬。それがみな樊川地方の敗戦を伝え、七軍の全滅、龐徳の戦死、于禁の投降などが、ひろく國中へ漏れたため、庶民まで上を下へと騒動して、はやくも関羽軍が攻め入るものと怯え、逃散する百姓さえあった。

魏王宮ではきょうもその事について大会議が開かれていた。この会議でも、関羽の名を恐れ怯えた人々は、